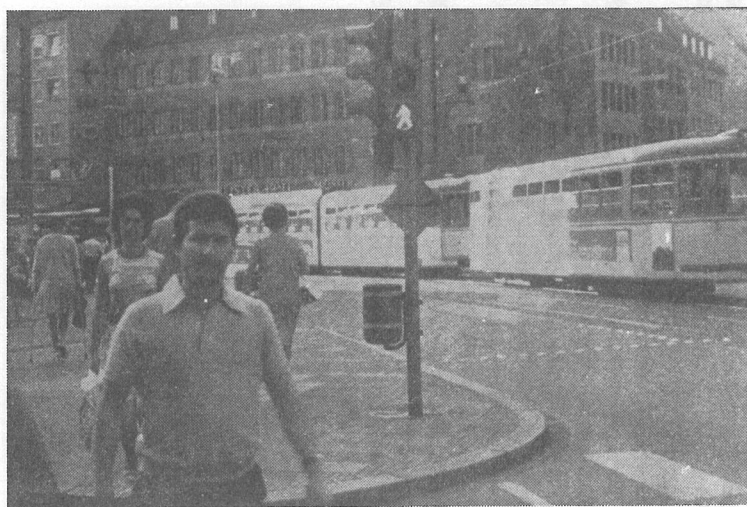


ドイツ視察記 (最終回)

伊藤 一男

ベルリンの日曜日

ホテルで食事をすませ再び街へでる。クーダムは市内随一の繁華街で、商店やレストランが並びショー・ケースは照明で輝いていた。買物をし



西ベルリン市内

ながら歩く。疲れるとカフェで休む。木苺のジュースが入った白ビールが最高で、通訳の珠実やヒリップなど相当にいける。ヨーロッパセンターの二階に「TOKYO」という日本料理店がある。十時、この店によった。提灯・浮世

ながら歩く。疲れるとカフェで休む。木苺のジュースが入った白ビールが最高で、通訳の珠実やヒリップなど相当にいける。ヨーロッパセンターの二階に「TOKYO」という日本料理店がある。十時、この店によった。提灯・浮世

絵・絹の座ぶとんなど日本調の店内は満員である。スキ焼と油の匂いがなつかしい。客の大半はアメリカ人らしい。一人三十DMの予算で天ぷら定食とお茶漬、味噌汁をとる(大体、日本で五百円位の内容だった)

ベルリンの夜は新宿に似ている。午前零時だというのに雑踏が絶えない。やはり若者が多く、殊に女性の軽装にはおどろく。住宅街にでると、栗の並木が続き、どこまでも歩道が水銀灯に灰白くぬれていった。日曜日のベルリンは静かだ。九時、おそい朝食をとって街へ出る。店の殆んどが日曜休業で、人も車もあまり見えない。ただ公園には人々が集っている。中央街の小さな公園にゆくと、円形のベンチには老人が多い。鳩や雀が足もとまでやってくる。パン屑を投げるとチツッと奪い合うように食べる。庭のない生活なので、皆んな小鳥や花壇を大切にしているのだ。老人のそばには子供たちが遊んでいる。大都会の谷間の「小さな平和」である。午後になる

く人々がいるのだ。だが、自由と平和を願う人々は、いつかきつと勝利するであろう。

「自由」と「人間」のことを忘れまい。「東京の温度は三十一度、湿度は七十二%」の機内アナウンスに、どよめきが起る。一ヶ月ぶりで踏む祖国。日本の大地だ。機の外に出るとワァーンと蒸し暑さが迫ってくる。バスに乗って税関に向う。ターミナルの屋上に国旗をみつけた時、ジュリーと「日の丸」の赤が瞳いっぱいに拡がった。「日本へ帰ってきたのだ」こみあげてくる涙を耐えながら、重い靴を持ち直して、力をこめて歩いた。

の姿はまだかまたかと待かまえていました。やがて坂を登りきったランナーの姿が見え始めるると一せいに歓声がわきおこり、国際マラソン宛らの応援風景でした。途中の沿道にはちらほら父兄の応援する姿も見えました。一方中学生の部は、クラス対抗で行なわれ、一年生五チーム、二年生六チーム、三年生六チームで各学年ごとに優勝杯の争奪戦が行なわれました。コースは六区間六名の走者で、小学生と同じ一三、二〇メートルでした。今大会の中学生の部で優秀な選手四名が抜擢され二月二十日に九十九里町で開催される山武郡市チームロードレース大会に出場する予定です。尚、今大会の成績は次のとおりです。

駅伝大会を開催

中二に好記録出る

恒例となった横芝町駅伝大会は、快晴に恵まれた一月十二日、横芝中学校を会場に行なわれました。

この大会は、横芝町体育協会の主催によるもので、小学生、中学生、一般の三クラスで開催される予定でしたが、今年度は、一般の部の参加チームがなかったため、小学生と中学の部で大会が行なわれました。小学生の部の参加チームは、各校とも六年男子で大総小一チーム、軽芝小三チーム、上塚小から二チームが参加して六チームで競技が行なわれました。コースは、横芝中学校をスタートし大総小学校前を通り、中台十字路を

左折し桜前、長倉を回って再び横芝中学校にゴールする、全長一三、二〇メートルでした。このコースには十一の中継地点があり、この区間を第一チーム十一名のランナーが第一、第二、第三走者へと引継ぎ走ります。また、このコースには心臓破りの丘にも匹敵する坂道が第三区間にあります。横中学校庭を一群となりて出発した各チームの第一走者も坂田池附近にさしかかると強風のためトップランナーと最後尾とは相当距離がひらき始めました。

一方、第四地点の大総小学校前には心臓破りの丘(振子坂)を登って来る豆ランナー

部	順位	記録
小学校の部	一位	横小 五八分〇〇秒
	二位	横小 五九分四〇秒
	三位	上小 五九分五七秒
	一位	一年生 五二分三六秒
	二位	一年生 五五分〇五秒
中学校の部	一位	一年生 五五分三六秒
	二位	一年生 五五分〇五秒
	三位	一年生 五五分三六秒
	一位	二年生 五一分三〇秒
	二位	二年生 五一分四〇秒
三年生	一位	五三分一〇秒
	二位	五三分五〇秒
	三位	五四分一三秒
	一位	五三分一〇秒
	二位	五三分五〇秒
三位	五四分一三秒	